

P-078

児童養護施設に入所している子どもの健康教育に関する文献検討

柚山香世子¹⁾、佐藤 奈保²⁾¹⁾城西国際大学 看護学部 看護学科、²⁾千葉大学大学院看護学研究科

【目的】

児童養護施設（以後、施設）を退所した子どもは、高校卒業後、家庭に戻るケースもあるが、多くは親を頼れず、自立した生活を余儀なくされる。健康上の問題に繋がる障がいや虐待経験をもつ子どもには、基本的に健康的な発達への支援に加え、さらに専門的なケアを含んだ健康教育が必要となる。そのため、今回は日本の施設で行われている健康教育について文献検討を実施し、必要とされる今後の保健医療職における支援について検討することを目的とする。

【研究方法】

CiNii、医学中央雑誌web版を用いて、児童福祉法が改正され退所後の自立支援が明記された1997年以降の文献検索を行った。キーワードは、「児童養護施設」、「健康教育」、「健康支援」、「保健教育」、「児童養護施設」、「性教育」とした。選定・除外基準に基づき、複数の研究者でスクリーニングを行い、健康教育の具体的記述のある36文献を分析対象とした。これらの文献を教育内容で分類した。

【結果】

健康教育の内容は「いのち・性に関する教育（性被害・加害教育含む）」26件、「食・栄養に関する教育」7件、「医療的ケア」について2件、「心理教育（感情制御）」1件であった。これらの教育を主に担当していたのは、看護職（保健師、助産師、看護師）や心理職、保育士・児童指導員、栄養士（管理栄養士）等であった。

最も多かった「いのち・性に関する教育（性被害・加害教育含む）」は、幼児から高校生を対象に実施され、施設を退所後の子どもが加わる場合もあった。教育は、子どもを同年齢のグループに分ける、個別に教育を行う、グループと個別の教育を組み合わせるといった方法で行われるとともに、入浴時に体の仕組みや変化、大切さを伝えるなど、施設における日常生活の中で教育が行われていた。看護職は、「いのち・性に関する教育（性被害・加害教育含む）」において中心的なメンバーとして関わり、施設職員と連携して支援に携わっていた。

【考察】

今回、いのち・性に関する教育についての報告が多く見られたが、上記のような特徴をもつ子どもたちの発達課題に沿った、障がいをもつ子どものセルフケアを促す教育が必要だと考えられる。さらに、健康教育を進めていくためには、多職種との連携・協働をしていくことが求められる。

P-079

こどもの命を守るため、医療と教育の連携推進を～日本小児循環器学会の取り組み

山澤 弘州¹⁾、内田 敬子²⁾¹⁾北海道大学大学院医学研究院 小児科、²⁾慶應義塾大学医学部 小児科学教室

【背景】2025年初め、小中高生の自殺者が過去最多という不名誉なニュースが流れた。少子高齢化が加速する日本で、このようなこどもの死亡数が増加しているという事態は由々しき問題である。日本小児循環器学会では、2018年より2020年まで「学んで救えるこどもの命」と題し、医師、教育者、患者及び家族向けの情報発信・教育事業であるPH Japanプロジェクトという活動を行った。その時の医療者へのアンケート調査では医療者が教育に関わる事に興味があると回答した者が99%で実際参加したいと回答した者も65%に上った。【方法】そこで日本小児循環器学会は2022年より「学会と教育の連携委員会」を立ち上げ、「いのちの授業」を中心に、生と死に向き合う話題を取り扱い、命の大切さの啓蒙活動に務めてきた。その活動内容を報告したい。【結果】実際の授業としては小中学生を対象に生と死両面から議論できる心臓移植を題材とした「いのちの授業」を多教科連携パッケージ型の1教科として行ったり、蘇生講習に合わせて1コマ授業として「いのち」の大切さを知ってもらう講演型の授業を行ったりした。高校生には所謂サイエンスカフェのスタイルで「臓器移植をテーマにした生命倫理」をテーマに検討会を開催した。個別の実践だけでなくPRと調査も兼ね2022年の日本小児循環器学会学術集会では、シンポジウム、市民講座を開催し「いのちの授業」の紹介を行った。この際のアンケート調査では約半数が教員だったが、56%が「いのちの授業」の開催は可能と答えるも、開催の支障となるものの改善は24%が可能と答えるに留まった。粘り強く活動を広げる必要性と、広がり易い媒体への介入の必要性を感じ、2024年教育関係者にも門戸の開かれた本学会でシンポジウムを開催した。その際のアンケート調査でも「いのちの授業」もしくはそれに類する活動を行った者は36%に留まり、更なるPRが必要と考えられた。その方法の一つとして、日本小児科学会蘇生科学教育委員会のお力をお借りして現在「いのちの授業」のホームページを作成している。このホームページに「いのちの授業」の開催を我々に依頼するコーナーも設けており、「いのちの授業」が更に広まる事を期待している。【結論】以上の「いのちの授業」を広め実践する活動を通して命の大切さを広めることが、最初に述べた自殺者を減らすことにも繋がると考えられる。